

『難民研究ジャーナル』の発刊にあたって

難民研究フォーラム座長 本間 浩

難民研究フォーラムの機関誌として、『難民研究ジャーナル』を発刊します。この機関誌刊行の意図は、わが国での難民問題研究を下支えすることにあります。ただし研究フォーラムとしては、この機関誌によって、研究上知りえたことが研究者の世界にだけ通用すればよいとするのではなく、できるだけたくさんの人々が難民問題に関心をもつようになるきっかけとなることを願っています。

すでに数回の研究会での発表および討論を通じて難民問題には実に多様な側面があることに研究会参加者は目を開かされましたが、難民をはじめ具体的な人間をめぐる問題は多種多様です。したがって、難民問題の研究には学際的な取り組みが必要となります。確かに、それぞれの分野に足場をおいた着実な研究が出発点になります。しかし出発点にいつまでも留まっているのでは、難民問題研究は不十分といわざるをえません。その出発点から、異なる分野の研究成果に触手を伸ばして行って、結実を生み出すことが求められます。

本誌に掲載された論文や報告、評論は、正に多様な分野のそれぞれの立場から発表された内容になっています。一方では伝統的手法に則っているものもあれば、他方では新進気鋭の感覚で、しかも海外での難民キャンプ生活にふれたからこそ鋭敏に捉えることができたものもあります。読者の皆さんは、それらを読んでみて、知識や情報を知ることになるのはもちろん、そのことに留まらずにさらに一歩進めて、それらの知識や情報を結びつけた考え方をどのように見つけ、またはいっそう掘り下げるべき問題点を掴み出すことができるでしょうか。

人間社会において、結びつけ、という発想がいかに大切であるか、を3月11日に起こった東日本大震災の被災者への救援・支援問題を通じて知りました。同震災を受けて、本誌の冒頭で取り上げることとした「難民と被災地をつなぐもの——『難民研究』を問い直した東日本大震災」では、難民支援団体による支援活動はもとより、日本にいる難民（難民認定申請者も含む）による支援活動も紹介されています。難民による被災者支援の話は感動的さえあります。被災者支援は、日本国内に留まらず、たくさんの国々の人々からも寄せられています。テレビで熱血講義ぶりが放映されたハーバード大のサンデル教授は、この大震災をきっかけにして地球市民の意識が生まれることを期待する旨のメッセージを発表したとのことですが、この意識が地球全体に広がれば、難民保護に関する国際連帯関係の構築も容易になるはずです。従来、国家代表が集まった国際会議では、難民保護のための国際的な協同負担を求める国際連帯の構想は、国家エゴの主張によってことごとく潰されてきました。被災者支援に対する国内的・国際的協力は、人間社会の可能性をあらためて見直すきっかけになるかもしれません。同時に、個々の研究分野においても、自らの構築を見直し、異なる分野との結びつけによって新たな結実を得ることになるかもしれません。難民研究フォーラムは、そのような展開の実現に大きな期待をかけています。